検証・浦和電車区事件の真実 No.20

民主化闘争情報 [号外] 2008年6月2日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第20回 猛烈な追及でY氏を脱退させたと自認！

2001年2月13日～16日まで4日連続・7回続けられたY氏(当該事件被害者)に対するJR東労組浦和電車区分会の糾弾集会。最後に、この集会について分析してみたい。

シナリオ通り追及が進められた職場集会

東京地裁で行われた当該事件の一審公判において、当該集会の冒頭、Y氏が待機させられている間、参加者で分会が発した「闘争宣言」を参加者で読み合わせていたことが明らかになった。「闘争宣言」には、「われわれは、Yの発言自体がグリーンユニオンの意を体し、YがJR東労組の組織を破壊せんと行動したことを全組合員に明らかにするものである。よって、Yはわれわれの今後の様々な闘いに対する妨害者でしかないことをここに明確にし、あらゆる組織破壊攻撃に対し、全組合員で闘いを挑むことを明らかにする」と記載され、さらに「われわれの闘いの前進を妨害するYを全組合員の怒りをもって糾弾し」と述べている。参加者は、この趣旨に基づき、Y氏を順々に追及していったものと考えられる。それにしても、これが普通の組合の文章といえるのだろうか…。

「Y追及集会」で「猛烈な追及」と自認！

また東労組は、集会でY氏の組合脱退を迫ったことはないと弁明しているが、分会が発した「闘争委員会ニュース第5号」には、「2月13日～16日の『Y追及集会』において出席者全員でY本人に心からの怒りをぶつけてきましたが、相も変わらず無表情であり人間としての感情を持ち合わせているのか疑わざるをえません。私たちの猛烈な追及に耐えかねたのか、ついにY本人の口から『東労組を脱退します』という言葉が発せられました」とあり、自ら「追及集会」と題し、Y氏が「猛烈な追及に耐えかねた」と記載している。

このほか、公判で被告側は、Y氏が録音したテープの証拠がある15・16日と、テープのない13・14日とは雰囲気は全く違っていたと主張したが、判決では一蹴された。

東労組が自ら認めているように、彼らにとって「闘いに対する妨害者」であるY氏が「猛烈な追及に耐えかね」て、脱退発言を強要されたことは明らかである。

ところで、2月8日にはY氏に脱退表明をさせたのに、東労組はなぜ、さらに執拗な糾弾、追及を繰り返したのか。Y氏は裁判公判で、「私を『組織破壊者』として徹底的に吊し上げる目的で開かれた集会だと思った。私を吊し上げるのを他の組合員に見せつけ、組織破壊を行うと私みたいになることを見せしめる集会だったと思う。また、脱退発言はあくまでも自分の意思だということを組合員の前で確認する趣旨でもあったと思う」といった証言をしている。このやり方は、組織に従わない者を集団で糾弾して自己批判させるという、あの過激派「革マル派」のやり口と酷似しているのではないかと(次号に続く)